

巻頭言 「読書のススメ」

小田原市教育研究所長 中畑 幹雄

先日、宮城教育大学 西林克彦教授が書いた「わかったつもり～読解力につかない本当の原因」という新書を読んだ。「子どもたちの読解力が課題である」ということが気になっていたからだ。

著書によれば、人が文章を読んで、浅いわかり方から抜け出すことが困難なのは、その状態が「わからない」からではなく「わかった」状態だからだと言う。筆者はこれを、「わかったつもり」と呼ぶ。そして、「わかったつもり」の最大の原因は、脳が持つ「スキーマ（認知の枠組み）」という常識が、文章の読み飛ばしや勝手な思い込みを引き起こすためだと指摘している。

大人でさえ誤読の罠に陥めとられてしまう現状を打開するため、筆者は自分が陥りやすい「わかったつもり」の原因を意識して読み返したり、他者の読みと比較して新たな文脈を導入したりすることを提案している。子どもの読解力の向上には、精緻に読むプロセスや習慣が不可欠なようだ。また、豊富な読書経験から、語彙力や言語感覚を高める必要もあるだろう。

翻って、子どもを指導する教師の読書習慣の実態はどうだろう。子どもと同じようにスマートフォン等を見るスクリーンタイムに押されて激減してはいまいか。教育研究所には、最近の新刊本も含め約4千冊の蔵書がある。校務支援ネットワークの市内共有・教育委員会・教育指導課・教育図書から図書検索もでき、借りることもできることをご存知だろうか。ぜひご活用いただきたい。

研究所便り 「これからの教育を共に考える」～おだわら未来学舎～

教育指導課指導主事 馬場 里子

令和8年度も、小田原の子どもたちのために、教育への理想と情熱を持った教職員を支援することを目的に、先生方のニーズに応じたテーマ設定の元「おだわら未来学舎」を実施しました。先生方の自主性を大切にするこの学びの場は、平成22年度のスタートから今年度で16年目を迎え、令和8年8月時点で通算76回を数えます。コロナ禍においても、オンラインでの参加を可能にするなどして継続・維持してきました。私自身も初任の頃から参加させていただき、先輩方の中で多くの学びを得てきた深い思い出があります。

今年度1回目は小林宏己先生をお招きし、「“つながり”のなかに立ち上る子どもの学び—『指導と評価』を見直す、この子その子に寄り添うまなざしの必要性—」について、2回目は選択理論実践パートナーの井上千代先生をお招きして「先生も子どもも笑顔になれるコミュニケーション～幸せと成功を両立する選択理論～」についてご講話頂きました。参加された先生方からは「(略) 教師と子どもという関係性を見直さなくてはいけないと感じました。また、子どもと相談しながら学習を進めていくことに、これから挑戦していきたいと感じました。」(第1回)「日頃から子どもたちと関わる中で、言葉・話し方一つでここまで結果を出すことができることに感動しました。(略) 子どもたちへの声掛けを工夫しながら、よい関係を築いていけるように尽力したいです。」(第2回)といったご感想を頂いています。これからも、本会を通して、先生方の温かい思いや熱意に寄り添い、子どもたちの未来へつながる豊かな学びを、共に育んでいけたらと思います。

小さなころみ 共同研究「小田原のインクルーシブ教育の充実に関する研究」
～多様な児童生徒を包摂する授業づくり～

教育指導課指導主事 眞鍋 智洋

共同研究員 ◎渡邊 拓知（大窪小） ・越後 有紀（足柄小） ・磯崎 瑞穂（報徳小）
○村上 真啓（酒匂中） ・鯉渕 一輝（千代中） ・瀬戸根 優記（橘中）

令和8年度より新たな共同研究を立ち上げ、「小田原のインクルーシブ教育の充実に関する研究～多様な児童生徒を包摂する授業づくり～」をテーマに、6名の先生方を研究員としてお迎えし、研究を進めています。

教室にいる多様な児童生徒の存在が明らかになり、従来のような授業では子どもたち一人ひとりの学びを充実させることが難しくなっています。一方で、「誰一人取り残されない」ことや「すべての子どもたちのウェルビーイング」が一層重要視され、次期学習指導要領に向けた論点整理でも「多様性の包摂」が柱の一つとして示されるなど、多様な児童生徒の学びをいかに充実させていくかは喫緊の課題の一つとなっています。

本研究では、「子どもは多様である」という原点を踏まえ、今ある人的・物的資源の中でいかにしてすべての子どもたちの学びの充実を保障できるか、その手立てを考え、実践し、市内に広く共有することをめざして取り組んでいきます。

研究はまだ緒に就いたばかりですが、研究員全員の力を結集し、山積みする課題に向き合っていきます。

ある教室から 「新体力テストの活動をとおして」 教育指導課指導主事 宮里 鷹

先日、小学校の「新体力テスト」の計測補助を行うため、2日間学校を訪問しました。初日は、教員を志す大学生が体力・運動能力向上指導員として参加しており、高学年の児童を対象に測定のコツや意識するポイント、正しいフォームを丁寧に指導していました。専門性を持つ大学生からアドバイスを受けた高学年の児童たちは、「どうすればより良い記録が出せるか」を自ら考え、主体的に取り組む姿が見られました。

驚いたのは翌日です。前日に大学生から教わった高学年の児童たちが、「コツやアドバイスを伝える側」となり、低学年の児童に測定方法や意識するポイントを教えていたのです。低学年に教えるという経験を通じて、高学年の児童は自身の理解を深めながら、伝える際には低学年に分かりやすい言葉で配慮しつつ、丁寧に説明していました。この関わりを通じて、自分たちが学んだ知識を再構成し、より深い理解へとつなげていました。

一方、低学年の児童は教えてもらった内容を自分なりに工夫し、全力で取り組む姿勢が見られました。高学年の児童の支援を受けながら「教わる側」としても主体的に学び、さらに相互のやり取りを通じて協力し合う心を育んでいました。「教える・教わる」関係が自然に形成される中で、お互いを認め励まし合う姿が随所で見られ、拍手や賞賛の声が体育館中に響いていました。

新体力テストの活動をとおして、児童の興味や意欲を促進し、学びの質を高め、児童の活動が単なる体力テスト計測にとどまらず、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる重要な機会となりました。そこには大学生と児童、高学年と低学年という異なる立場の人々が互いに協力し合い、学びを深め合う理想的な「協働的な学び」の姿がありました。